

—わがまち歴史探訪、足もとの文化遺産への誘い—
ミュージアム都留からのお知らせ

芭蕉のさと企画展

甲州俳諧展「書籍の諸相と俳書」

会期 2月3日(日)まで

休館日 月曜日、第3火曜日、祝日の翌日、
年始(1月1日～1月3日)

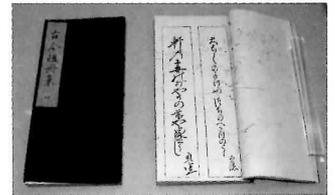
現代の書籍にも色々ありますが、明治以前の書籍には様々な形態のものがありました。手書きの本(写本)、印刷された本(版本)、読むと言うより眺めるのにふさわしい美しい料紙を使った本、実用的な暦や絵図など、その目的に合わせて様々なつくりとなっています。

本展示会ではそんな様々な形態の書籍を展示紹介しています。貴重な資料とともに、先人の本に対する愛情や工夫を味わってください。

展示物の紹介

『古今短冊集』(毛越編)

本書は複製ですが、とても面白い本と言えます。歴史的に考えるならば、和歌世界を中心として、手鑑類(手鑑とはお手本という意味で、古人の優れた筆跡を集めてまとめられたもので、書のお手本とされたもの)がありました。その世界を継承して、近世期になり『御手鑑』(慶安4年、1651年)が刊行されました。本展示においては『御手鑑』の後刷り本が展示されていますのでご覧ください。



さて、世に一点しか存在しえないはずの手鑑が出版されることにより、近世人は古人の筆跡を身近に置けるようになりました。この動向を俳諧に持ち込んだのが、西鶴編『古今俳諧師手鑑』(延宝4年、1676年)です。超大型の書形、摸刻短冊の右肩に作者に関する注記を付するなどして『御手鑑』に対するパロディ意識が際立つようなスタイルを備えています。

対して与謝蕪村と毛越とが協力して宝暦元年(1751年)に出版した『古今短冊集』は、俳人手鑑のスタイルをとるものの、もはや書名からして「手鑑」という名はとりません。和歌のまね事ではなく、俳諧なりの独自性を主張しながら、新風に資するべきエネルギーを刻みこんだ俳書として注目されています。

勝山城のなぞに迫る!

勝山城の調査も新年を迎え、いよいよ大詰めに近づいて来ました。さて、発掘調査ではいくつか成果が上がってきました。まず、二の丸の調査の中で絵図に記された道らしきものが明らかになってきました。ここは二の丸の北側のやや小高くなっている所で清掃をしたところ石積みが確認されています。恐らくこの石積みの上を歩いて本丸へ登って行けるようにしていた可能性が高くなってきました。つまり、現在の遊歩道とは全く異なる道順で本丸へ登って行ったということが考えられます。

また、現在、二の丸の一部を深く掘り下げていますが、最も深い所からは釘・鉄くず・炭などが確認されています。このことから、ここで鉄づくりを行った可能性が考えられます。いつの時代のものかは特定できませんが、恐らくお城を築城して間もないころのものであることは間違いありません。また、最も深い所からは柱の穴も確認されており、二の丸に建物が建てられていた可能性も出てきました。

今年も気持ちを新たにたくさんの成果を出せるよう調査に臨んでいきたいと思ひます。

この作品は、ゼウスの頭やひげを女
体で描いています。
美術館では、この作品のほかギリシ
ヤ神話を題材にした油彩画も展示して
います。ぜひ一度お越しください。



『ゼウス=ZEWS』
(1976)石版画

その後、予言通り、父クロノスを倒
し、他の兄弟たちと世界を征服し、オ
リンポスの大神となる。
ウラノス(ゼウスの祖父)は、クロノ
ス(ゼウスの父)が、自分の子どもたち
に統治権を奪われるだろうと予言した。
そのため、クロノスは、生まれてく
る自分の子どもたちを次々に飲み込ん
でしまった。妻のレア(ゼウスの母)は、
それを恐れクレタ島に渡り、ゼウスを
出産した。ゼウスは島でニンフと山羊
に育てられた。

Mythologie Grecque
増田誠美術館
増田誠が描く神話の世界
会期 平成20年3月2日(日)まで
午前9時～午後4時30分
会場 増田誠美術館
(ふるさと会館2階)
休館日 月曜日、第3火曜日、祝日の
翌日、年始(1月1日～3日)